

令和4年度
第1回大野市総合教育会議
会議録

日 時：令和4年12月27日（火）午後2時00分～3時30分

場 所：大野市役所 2階 大会議室

令和4年度 第1回大野市総合教育会議

日時：令和4年12月27日（火）

午後1時30分～

場所：大野市役所 大会議室

1 開会

2 市長あいさつ

3 議題

(1) 講話 「自律して生きる力をはぐくむ～麴町中の取組から～」

講師 大野市陽明中学校 教頭 羽生裕美 氏

質疑応答

意見交換

(2) その他

大野市総合教育会議出席者名簿

	役 職	氏 名
1	市長	石 山 志 保
2	教育長	久 保 俊 岳
3	教育委員 (教育長職務代理者)	馬 道 保
4	教育委員	松 田 輝 治
5	教育委員	羽 生 た ま き

(事務局)

1	行政経営部長	吉 田 克 弥
2	政策推進課長	山 崎 勝 彦
3	教育委員会事務局長	真 田 正 幸
4	教育総務課長	指 岡 哲 郎
5	学校教育審議監	千 田 佐
6	こども支援課長	加 藤 智 恵
7	生涯学習・文化財保護課長	佐 々 木 伸 治
8	教育総務課課長補佐	小 林 勝 信

<傍聴者>

福井新聞社 大野支社

1 開会

―― < 市民憲章、教育理念唱和 > ――

2 市長あいさつ

本日は、大野市総合教育会議をご出席いただき、お礼申し上げます。

また、日頃から教育委員会所管の取り組みに対する大変なご尽力に、この場を借りて感謝申し上げます。

振り返ると、新型コロナウイルス感染症が令和2、3、4年、丸3年となってきた。このような中で教育行政を進めていただいていることに関して、本当に大きな気遣いをいただけてきたものと思う。

また、今年に入り2月にロシアのウクライナ侵攻に始まった世界情勢の変化の影響を受け、福井県や大野市内でも、例えば物価高やエネルギーの関係など社会情勢も変化している中で子どもたちの育ち、学校教育、社会教育、文化財行政に対する取組みに、重ねて感謝申し上げます。

昨年12月、ちょうど1年前になるが大野市学校再編計画を改定いただき、本年度から、まずは中学校の再編について事細かに詰めて、学校の現場の方もご準備いただいている状況である。

本日は、陽明中学校の羽生教頭にお越しいただいた。東京都の千代田区立麹町中学校に、昨年度1年間派遣されていた。そこはよく市長会の行事が行われる都市会館のすぐ近くの学校で、実際に先生のお姿を拝見しに行った。明るい校舎の中で、非常にのびのび活躍している子たちの姿を拝見し、羽生教頭の貴重なご経験が、大野市の教育に良い影響を与えてくれるものと思った。

そういったことで、今日はたっただけのお願いで羽生教頭に講師を務めていただけることになった。

大変お忙しい中、時間を割いていただいたことにお礼申し上げます。

教育委員の皆さまには、まずはお話を聞いていただき、その後に意見交換をさせていただく。

3 議題（進行：総合教育会議設置要綱第4条に基づき市長が務める）

(1) 講話 「自律して生きる力をはぐくむ～麹町中の取組から～」

講師 大野市陽明中学校 教頭 羽生裕美 氏

――講師作成のパワーポイント資料を投影し、説明――

【市長】

貴重な体験のお話をしていただき、お礼申し上げます。

私にとっても、日々の業務の参考になることがいろいろとあった。

せっかくの機会なので、質疑応答の時間を取りたい。

【羽生委員】

先生方の県外への派遣は、毎年行われているのか。また、麴町中学校への派遣は、ご自身で選ばれたことなのか。

また、麴町中学校の取り組みの中で、学校生活のことは生徒中心の有志の会が主体となっているとのことであったが、部活動はどのように運営されているのかお聞かせいただきたい。

【学校教育審議監】

福井県は、学力、体力ともに高いということで、平成27年、28年ぐらいから福井県が毎年数名県外からの派遣教員を受け入れていた。大野市では、有終南小学校が派遣教員を入れていた時もあった。また、令和元年度、2年度、4年度は、下庄小学校で特にフリートークということで学校教育展開をしていて、茨城県教育委員会が非常に興味を持たれた。

3年連続ではなかったが、昨年度は新型コロナウイルス感染症の状況で受け入れることができないことがあった。福井県からも、茨城県から受け入れるので、茨城県へ派遣を出すということもあった。現在の指導主事のうち1名も、茨城県へ派遣されていた。

今回も、麴町中学校への派遣ということで、県の教育委員会から指名されたので、大野市としても非常に今後の参考になると考え、本人の承諾をいただき派遣することとなった。以前に比べると、このような派遣交流は、新型コロナウイルス感染症の関係もあり少なくなっているとのことである。

【講師】

私は、県外の学校に行ってみたいという希望はあった。

麴町中学校では放課後は生徒を帰すという方針なので、部活動は一応あるが、毎日行っている部活はない。多くても週3日である。

先ほども触れたが、プロの方から学ぶということで外部指導コーチがほぼ各部にいて、教員が指導することは少ない。教員は顧問として引率などをするだけで、専門的なことは外部指導コーチが指導している。

今年度は、東京都でも部活動の地域移行ということで、千代田区も取り組むと聞いていた。東京には外部講師や外部指導コーチの派遣をする会社があるので、その会社に委託すると説明を聞いたが、今年度からの取り組みなので実際

にはどのようになっているかは把握していない。

教員、生徒ともに、部活動の負担はかなり少なく、生徒は午後3時半には下校していた。

【馬道委員】

キーワードで、有志という言葉聞いた。

委員会などを有志で行われているということであるが、自分たちの学校を見つめて、より良い学校にしたいと考えたときに、委員会活動は有効な活動だと思うが、これを全員参加ではなく有志でやるということに少し驚いた。

有志として活動する生徒は何%ぐらいか。ほとんどの生徒なのか、それとも半分ぐらいなのか。

陽明中学校の場合は、行事を行う場合に実行委員会を立ち上げて、委員会の生徒を中心に計画を立てて実施していくが、先ほどの説明で「有志」と「実行委員会」の二つの言葉が出てきたが、その二つの違いはどうか。

先ほど「1学年は授業中に出て歩く生徒がいるなど大変だ、どうしたものか」という悩みを言われていたが、動画を見みると生徒は明るく楽しそうに、とても生き生きと活動しているように思う。また、グループ活動がすごく多いとも感じた。このような学校に、不登校になる生徒はどのぐらいいるのか気になった。

私の親戚に名古屋の学校に通う中学生がいて、授業が早く進んでいると聞いた。例えば、陽明中学校では理科で気象の単元に入ったところなのに、その中学校は、もう電気のところに入っていて、「今、オームの法則を習っていて難しいんです」と話していた。

なぜ、こんなに早く進むんだろうと聞いたら、3学期の受験に向けて、学習することは先に進ませてしまうという話をしていた。受験競争が激しいところなので、進路のことも考えて早く進めているのかと思った。

麴町中学校では、主体的な学習を進めているので、その辺と矛盾があるのかとも思うが、進み具合がどうかを聞きたい。

【講師】

委員会に参加する生徒の割合は、意外に多くの生徒が入っていて、それは、先輩が生き生きと活動している姿に憧れるということがあると思う。

もう一つは、委員会に参加していると高校入試などいろんな意味で有利だと生徒が考えているということもあると聞いた。

また、自分たちで企画を考えて練り上げたものが、本当に学校の中でそのまま反映されていくことの楽しさもあると思う。

委員会で問題なのは、例えば体育委員会だと100人以上いるが、大人数に

なると逆に動きにくくなる。そのことが、全協で問題になっていたが、やりたと言った生徒に参加できないということはできないので、この問題をどうするかについては今年の3月の時点では、話し合っただけで決めていくとなっていた。

また、実行委員会となっているが、参加する生徒は有志である。いろいろな企画を立てていくと人が足りなくなってくるので、例えばパソコンに堪能な子がいたりすると、助けてくれないかと声掛けして参加してもらおうようなこともしていた。

不登校については、1年生が156人いたが、小学校からずっと継続的な生徒も何名かいる。新規では、中学生になって学校に来にくくなった登校渋りが2名である。でも、完全な不登校ではなく、不登校は非常に少ない。

最後の進度については、主体的な学びということでAIドリルの話をしたが、例えば数学は、中学1年生は1年間で135時間となっているが、1年生でやらなければいけない学習範囲を、AIドリルなどを使って大体半分ぐらいで終わる。あとの残った時間はプログラミングや3Dプリンターで対象図形などのパズルを作ることなどをやっていた。

この学校は、1年生の学習範囲が早く終わったから2年生の学習をすることはない。早く終わっても残りの時間は、その学年の発展的な内容をやる。もちろん、すごく力のある生徒もいるので、その生徒は自分が理解したら自分がやりたいことをやっている。例えば、大学への数学とかなどをやっている。それは、やってもいいと言われている。塾に行っている子は、たくさんいる。

【松田委員】

1、2週間の短期間ではなく、1年間という長期にわたって自分がいつも置かれている条件と違うところを見てくると、自分の住んでいるところや学校、生徒の良さや違いがまた見えてくると思う。今後は、この経験を生かしていただくことを期待する。

家庭教育でのしつけということで、学校の教育を受けるための支援はしているが、麴町中学校の話で出た「自立」、自分を律するのではなく、自分で何かするという立つ方の自立。これをやりすぎると、今の中学生はどうなのかと、ここ2、3日悩んでいた。

子どもを教育するときに、何でも自分でする、自分でするということ、どこまで保護者として許してあげるといいのか。放任ではないが、一生懸命やっているということで大目に見たいところは、見ているが、正直言って、体育の成績だけは変わらず抜群に良かったが、他の教科の成績が1学期に比べて2学期の成績が落ちている。麴町中学校の例を聞くと、子どもと接するときに、ある程度大目に見ないといけないという気はするは、先生方としては、どうい

ふうに子どもに接すると良いと思うか。

大野の中学生は「どうあるべきか」ということを、聞かせていただけるとありがたい。

【講師】

東京都の学力調査の結果は全国でも上位で、福井県にも引けを取らないぐらいどんどん伸びている。その要因はいろいろあると思うが、東京都が伸びている明確な要因は「これです」ということは把握していない。

麴町中学校からも、日比谷高校や開成高校などの有名な高校へ進学する生徒もいれば、そうでない生徒もいる。何をもって学力かというところはあるが、学力調査の結果を見ると、昨年度は東京都の平均よりは低く今年度は高かったと聞いている。東京都の平均は、福井県とあまり変わらないのでそんなに低くないが、先ほども申し上げたように塾に行っている子は多いということが、現実的にある。

家庭教育でというお話もあったが、特に麴町中学校がなぜこういう支援をしていかなければいけないのかというところで、大野市や福井県と大きく違うところが、この学校の生徒にとって教員は評価をする存在ではなく、話を聞いてくれる、理解をしてくれる存在でいえないといけないこと。親兄弟が非常に高学歴で、イエール大学を卒業して特許で生活できる人や、東大と京大の両方受かって一人暮らしをしたいから京大に行ったという人がいる家庭で育っている。そのような家庭の子どもで、私たちから見ると十分な力があると思うが、「あなたは駄目」「もっと点を取らないと駄目」「だから受からない」などの言葉を掛けられている生徒が非常に多く、親は評価をする相手になっている。だから、先生は評価する相手ではなくて、話を聞いて分かってくれるという、そういった言葉掛けをして、そういう存在であり続けたいといけない。

大野市はそういう土壌ではなく、本当に温かいおじいちゃんやおばあちゃん、3世代の本当に温かい家庭で育っている子どもたちが多い。

地域も、誰が隣にいるか知らないとか、下手にあいさつすると不審者と思われるところである。そういった点でも、全く違う土壌で育っているのだから、考え方も違っている。

ただ、学校教育として、これからは自分で選択していく、自分で学ぶ方法を選択してこういう道を進んでいく、自分の責任で好むという生徒になってもらうためには、やはり自己決定を少しずつしていくことになると思う。

大目に見るとという言葉があったけれども、大目に見ているわけではなくて、どうするかという決定をするときに「こっちの道を取ったときにはこういうリスクがあるよね」「こっちを取ったらこういうリスクがあるよね」それを踏ま

えて「あなたはどっちを選択するの」という情報整理をすることが教員や大人の方法だと思う。

例えば、スマホでゲームしていいよとなったときに、大人が「家庭学習をしないといけないから両立できるの」と言うと、子どもは「できる」と言う。「でも、今まで見てきてそういう姿が見られないから、じゃあどうするの」と言うと、「1時間ゲームをして、次の2時間は家庭学習を頑張るよ」と言うかもしれない。そういったところを対話していく。大人がこうなさいと言うことは、与えることになり、人のせいにしてしまうことになる。自分がリスクを背負って取ったというところに結び付けるために、そういう言葉掛けをしていく必要があると思う。

ただ、私が今まで申し上げてきたのは、学校教育のことなので、家庭教育に関しては、簡単な話ではないところもあると思うので、また、家の方と一緒に考えていかなければいけない。

【市長】

本当に、先生との対話が尽きないわけであるが、時間も来たようなので、ここで質疑応答を終える。

今日は、本当にいいお話をいただきお礼申し上げます。羽生教頭はここで退席されるので、今一度お礼を込めて盛大な拍手をお願いします。

この後は、少し休憩を挟んで意見交換を行う

— < 休憩 > —

【市長】

それでは、再開する。教育委員の皆様から先ほどのお話の感想でも、ご提案でもいいので、一言ずつご発言いただきたい。その後、学校現場のことであったので、教育長から一言いただきたい。

私の感想を先に申し上げると、タイトルどおりのお話だったとっていて、生きる力を育む、これは大野市の教育行政においても大変大事なキーワードになっているが、羽生教頭が昨年度麴町中学校でされた生徒との対話やプロセスは、社会に出てもずっと繰り返す、そうした大事な自分との問い掛け、そういうことを教えていただいているんだと思った。

それで先生に申し上げたとおり、日々の業務にも共通するものがあったと思いながら拝聴した。

【羽生委員】

今日は、貴重なお時間いただいたことにお礼申し上げます。

羽生教頭ご自身が、指導者として、教員として気づかれたことがすごくたくさんあったようなので、今後、教育の中で生かしていただけたらありがたいと思う。

特に、中学校は再編が迫っていて、学校名とか校舎は既存のものが残るが、生徒たちが、一同に新しい中学校へ移行していくなかで、先生が学んだような十人十色というか、どの地区の子も一緒に、どの地区の子も一人一人が輝ける、そういう自立、主体性というものが新しい学校のなかで、今日学んだことも含めて生かされると良いと思う。

ただ、コロナが非常に長引いていて、個人的には、不登校の数や、今日の新聞でも、先生方の精神疾患によるリタイヤが過去最高ということが掲載されていたので、見えないところにも注意を配らないと、漠然とした孤独感や悩みで、先生や子どもが次々とフェードアウトしていくということも報道で知った。

大野市はそういう意味においては、根っこの教育の幼児教育からつなぐ教育、もう一つここに自主性に加えてつなぐ教育という母体が息づいている。

学校や保育園だけの問題ではなくて、家庭も地域もスクラムを組んで盛り立てていかないといけないとあらためて感じている。

【松田委員】

先生方は、熱い思いで子どもたちの教育をしていると思うが、車の両輪になるように家庭の方でもきちっと親が勉強して子どもたちが「どうあるべきか」ということを考えていかないといけないと思う。

その中で、小学校1年生の孫が冬休みに大阪へ4日まで行ったが、大野市の子どもは先ほど羽生教頭が言われたように、本当に温かい雰囲気の中で育っている。先ほどの話では、都会ではあいさつをすると、もしかして誰かに連れて行かれる可能性もあるし、不審者と間違われるようこともあり、全然条件が違うところに子どもたちが住んでいる。どちらかと言えば、都会の子どもの方が社会づれしてくるのではないかなと思う。

コロナ禍で子どもが市外や県外へ出ていくという経験が、少なくなっているような気がする。

例えば、大阪に行った子どもの話で、大野でも公共施設でエレベーターに乗る経験はできるが、エスカレーターに乗った経験がない。大阪に行った時に、スカレーターの乗り方が分からず、上の階に行きたいのに降りてくる方に乗ってしまったようである。

エスカレーター一つを取ってみても、経験しないことはなかなかできないということで、家庭でも経験をさせてやりたいが、学校でも何か工夫してパソコンやタブレットを使って、社会のいろんなことを自分の知識として勉強できるような機会があったら良いと思う。

大野の子どもたちは、ゆったりした環境で育っているので18歳になった時に大人になったんだとして社会的責任を持たされても、変なところでかわいそうな目に遭うんではないかという気がする。

私らも頑張りたいが、ぜひ学校教育の方でもそういう経験をさせていただけたらと思う。

【馬道委員】

大野市は、魅力ある学校づくりが2年目に入っていると思うが、随分浸透してきていると実感している。これによって、教師の授業のスタイルが随分変わってきたことを感じている。どちらかということ、これまでの授業では、教師が一方的に教えるというスタイルが多かったが、今は羽生教頭のお話の中であったとおり、学習主体の授業に随分変わってきている。

教員が授業で発問し子どもたち一人一人が答えるだけではなく、グループで相談してみようといった活動がよく入ようになってきたと思う。まず自分の考えを持たせ、グループで考えを深め合い、まとめて発表するというスタイルがとても増えてきている。

例えば、タブレット端末を利用して、国語の短歌ではどういう状況情景を詠っているかをまず個人が考えてグループでどんどん付け加えて全体としてまとめて発表するという活動や、理科では実験の前の予想を共有して共同で考えるといった使い方もしている。

今は、主体的にみんなで自らを考えるという場面が多いと感じている。

2点目は、学校行事にプロのカメラマンを招待していろいろ指導受けているという話があったが、この取り組みは良いと思った。大野市で新1年生を対象に、大野市ゆかりの芸術家を呼んで各学校で演奏していただくアートドリーム事業を実施しているので、とても良い取り組みをしている。ぜひ、今後も続けていきたいと思う。

【教育長】

今日は、羽生教頭の経験を、皆さまにもお聞きいただけたというのは本当にありがたいと思う。コミュニティ・スクールやエコスクール、部活動など、今日のお話以外にも経験されたことは多い。また機会があれば、ぜひお話を聞きたいと思っている。

令和6年度に中学校、8年度に小学校の再編を控えている。これは、学校の統廃合だけではなく教育の再編だと思っているので、そこに今日のお話のような違った視点をしっかり入れたい。大野市民の英知を集めて、大野の教育、それは社会教育であり、生涯学習も含めて再整備していく必要があるだろうと思う。このような考えで、大野市が目指す教育を再編計画に載せている。

次に、未来の学び舎づくりということで、今、学校の施設の改修を進めている。

次に、教育の中身の問題で、主体的な彼らをどう育てていくか。

そして、コミュニティ・スクールや部活動などの部分。

四つの領域を自分ではイメージしているが、しっかりそこを落とし込んでいきながら、この機会に教育の再編をしっかり進めたいと思う。

本日のお話は、校長会や教頭会でもされていて校長や教頭もしっかりと考えているところである。

今後とも、いろんな形でご支援いただけるとありがたいと思う。

【市長】

教育委員の皆さま、ありがとうございます。時間の都合上、一言のみで大変恐縮であったが、今日の会議が良い機会になって大野市の教育行政を進めていくことに期待したい。

市長部局でもよくキーワードとして申し上げているが、外部からの適切なインプットを適宜入れていくことが大事だろうと思う。各委員の発言の中にも大事な言葉があり、羽生教頭の体験を通じて大野の教育行政の良さも分かったということもある。このことは、本当に外部と交流しないと分からないことである。

大野市の18年教育のなかで、小さい頃から家庭教育やいろんな地域の方の目も含めて育てていただいていることで、当初から安定した中学校での生活ができていることは、今日あらためてありがたいことだと感じた。

意見交換は、以上とする。

(2) その他

なし

4 閉会